



び出した「主の道を歩みなさい」という理由がはっきりと表されていると思われます。正しい者と悪者と言っている「悪者」という言葉はここ(1篇)に4回出てきますけど、最初がアブラハムの箇所(創世記18章)に出てくる「悪者」です。

「罪人」という言い方も2回出てきます。ソドムの罪が酷いというところから出てくるのが「罪人」という言い方の最初です。ソドムの(創世記)13章13節。この(1:5)悪しき者はさばきに堪えないの「さばき」は正義と公正を行うの「公正」です。ミシュパッドということですから、この1篇を見た時にアブラハムのその箇所(創18:19)を思い出さないと、はずがないのに送り出したことがなかったという、まだまだ未熟者ですね。

1篇は、アブラハムの契約の観点で見たこともなかったという感じですが、そのことを無視することはできません。道の話です。父アブラハムを通して「天の父を知る」というのが全体の第1集の話で、「天の父よ」と言っている時にこのアブラハムを通して父を知るというアブラハムの話の出だしです。

ヨシュア記1章8節の「昼も夜も口ずさんで栄える」というのは、エレミヤの17章にもあります。その箇所を思い出してヨシュアと思ってたんですけども、ヨシュアはヨシュア記1章4節にもあるように、「この地を受け継ぎます」と創世記15章、他で、言われている「アブラハムはその地をユーフラテスまで受け継ぎますと言われている箇所を、いよいよヨシュアが勝ち取るという段階に入ったということで、ヨシュアを連想することができると思います。「約束の相続を受ける時がいよいよ来ます」というのがこのヨシュアでした。

ヨセフのことも連想することができます。「おきてを守るものが栄える」ということなんですけど、そのヨシュアもヨセフも主が共にいて成功させる、栄えさせてくれるということで、いよいよこの相続の時が来ますというところの人物でした。

2篇をそうやってみると、14章のケドルラオメルとの戦い。国々が集まって戦っていく。しかし、それに立ち向かって勝ちました。それでメルキゼデクから祝福を受けるわけですけど

「王たちの父となる」ということがこの(2篇)8節のところに、「もろもろの国を与えます」ということも書かれていました。アブラハムの…というのは、創世記のという意味ですが、12章、15章、17章に所有地を与えますという箇所がありました。

エレミヤ17章8節で「栄える」という話があり、その1個前のところに「主により頼むものは幸いです。その人は栄えます。」ということで、この2篇と1篇がセットだよとよく言われたりします。これらは「幸い」で囲まれています。主に信頼する者が栄えるというのはここでエレミヤでも繋がりが分かると思います。

真ん中の3、4、5、6という詩篇に多いのが「呼んだら聞いてくれる。叫びを聞いてください。願いを聞いて答えてください。み顔の光を照らしてください。」という「主の名を呼ぶ」ということが出てきます。主の名を呼ぶこと、祈ること、叫ぶことかみんな同じようなことです。その祈りを聞いてくださる神様です。天で隠れたところで見られる天の父が聞いてくれるということです。祈りを聞く「主の名を呼ぶ」ことですね。これもアブラハムがよくやっていたことでした。最初に祭壇を作ります。最初に出ていきなさいと言われたところから出て行く。約束を与えられと言われると、ベテルとアイの間に祭壇を築いて、主のみ名によって祈る。主のみ名を呼ぶということがここ(創世記12:8)にあります。

また祭壇を作って主のみ名によって祈る。主のみ名を呼ぶ。それは創世記4章の最後のセツの子孫も主の名によって祈ると書いてあります。主の名を呼ぶことを始めた。祭壇を作るのは、祭壇を作ったら主の名を呼ぶということです。祭壇を作って主の名を呼ぶというのは21章にもあります。主の名を呼ぶと、祭壇でいけにえを捧げると、神様の答え方がすごいですね。天から火が降ってきて、栄光をあらわす。「祭壇でいけにえを捧げると天から火が降ります」というのがこのレビ記10章にあります。

他にもエリアとアハブの対決のところで(1列王記18:37)祭壇でいけにえを捧げた時に、火が降ってくるかどうかという話がありますね。これは、第1列王記18章。

オルナンの打ち場の話と神殿の場所が見つかるところ(第1歴代誌21:26)。そこでも祭壇を築いてささげ物したら、天から火が下って答えてくれたということがあります。

ソロモンの神殿ができた時も、捧げた後に「火が天から下って主の栄光が満ちました」ということが書かれています。それと、(2歴代誌30:)これはヒゼキヤの時の話だったと思います。ここでもいけにえを捧げた時にという話は、情け深い話ですね。いけにえを捧げた時に天に届きました。天に届いたかどうかは火が下ることによって分かるような感じです。その天のケルビムの上に座しておられる主に祈ると、耳を傾けて目を開いてご覧くださいということが、神殿を作った時の目的だったわけです。

主の名を呼ぶならば、私の名を置くために選んだ宮で、目と心は、そこにありますということがずっと言われることです(第2歴7:16)。その主の名を呼ぶと聞いてくださるといことは、「主の名を呼ぶ者は皆救われる」というローマ10章や、使徒行伝、ヨエルというところがありました。主により頼む者が主の名を呼ぶと答えてもらえるという話がありました。それとヨシュアが入って行って勝ち取る場所というのは、どういう場所かという、「主が名を置くために選んだ場所で」と言われています。主の名を置く場所に入っていきわけです。(申命記) 12章から26章に主が名を置くために選んだ場所という言い方は申命記の12章から26章に18回、ほとんどそこに出てきます。12章から26章は、申命記の中で具体的に何をすべきかという教えの箇所です。ですから、神殿、シオン、契約の箱、御座、祭壇、井戸、生贄。これはみな主を呼ぶ場所というようなものです。主を名を呼ぶ場所で何をしなければいけないかといった時に目立つのが、みなしご、やもめ、貧しい者を憐れむというのが教えられてる教えです。貧しい者を救う神様。だから、あなた方もあわれみ深くするべきと。主の御名の中に「あわれみ深く情け深い神」という言い方があります。出エジプト記33章、34章。その主の名の具体的な行動というのが9篇、10篇の中に出てきます。みなしご、やもめの叫びをあなた方は聞かなくてはならないというのは、出エジプト記22章に書いてあります。

9篇、10篇はアルファベットの詩篇なのでセットなのですが、こちら9篇は貧しい者を憐れむ。こちら10篇は、悪者、その虐げる者を裁くというような並行になっているかと思います。8篇と11篇。主の名、主の名と天にいる、天にいるというような繋がりがここ(8, 11篇)にあります。

天の御座についておられる方がへりくだって私たちと共についてくださるということですが、この11篇は天で調べる。正しい者、悪者をさばく。火と硫黄ですから、ソドムとゴモラのようなさばきで、正しい者を愛するというなことを見ると、1篇に似ている。

1篇、2篇に似ているということで、また最初の第1集の最初に戻っている。11篇の出だしは、2篇の終わりという連携もあります。

第1集に多いのが、国々、敵、国民と戦っているという言葉です。他の第1巻の中での他の集よりも、第1集に多いのが国々、敵、国民、山、シオン、天、御座。天と地の民の戦いみたいな感じです。悪者、悪、不法、正しい者、貧しい者。これは非常に多いです。滅びる、さばく、憤りという天の御座についてさばくという言葉も多いですので、この第1篇から11篇までをアブラハムの契約の約束、その成就としてのモーセの時代、ダビデの時代ということを見て全体を把握するということになると思います。